

[遭難時の搜索費用について]

日本の山での遭難時の救助には、県警山岳警備隊のヘリコプタが大きな力を発揮しています。多くの遭難者を救ってこられた有名な長野県警山岳警備隊の隊員数は、[Wikipediaによると](#) 27名(航空隊はうち数名)だそうです。これらの27名の隊員の方が、北アルプスなどを抱える長野県全域の山岳警備に従事されておられます。富山県警山岳警備隊も、隊員は27名だそうです。

県警のヘリコプタが飛べない場合(パイロットが手配できない、遭難事故が重なった、ヘリコプタが整備中であるなど)は、県の防災ヘリコプタに救助要請がなされる場合もあるかもしれません。しかし、遭難者の状況、遭難場所などによっては、臨機応変に民間のヘリコプタに依頼する場合(故 [篠原秋彦氏](#) が有名)もあるそうです。民間ヘリコプタの場合は、待機時間・救助時間を含めて、1時間あたり約60万円程度の費用がかかると[新聞記事で指摘](#)されています。救助要請を受けてから、雲の晴れ間を3時間待って1時間かけて救助した場合、60万円×4時間=240万円の費用が遭難者に請求される計算になります。

山岳地帯で救助に当たるヘリコプタは有視界飛行ですので、雲やガスで見通しが悪ければ、飛ばません。しかも、空気の密度が低く、気流および天候が不安定な標高が高い山岳地帯でホバリングして救助に当たるには、極めて高度な技術を持ったパイロットとよく整備された高性能な機体が必要です。費用負担ができるか現場ではっきりしない(登山計画書で遭難対策保険加入がわからない)場合は、臨機応変な民間ヘリコプタ要請ができず、唯一の晴れ間をみすみす無駄にしまったり、ということになりかねません。

また、地上からの搜索の場合は、各地の遭難対策協議会の救助隊が頼みの綱だと考えられます。救助隊員1人1日あたり3~5万円程度の日当が必要と言われています。

遭難など、自分には関係ないと思っておられませんか？できればそうあってほしいですが、下山時に滑って転んで強打して歩けなくなったり、捻挫して山中で歩けなくなったりしたら、それは遭難です。遭難救助費用に備えを持つことは、登山者やパーティの一員としての義務ではないでしょうか。

※2009年8月に当会の会員が目撃した長野県警ヘリ「やまびこ」によるヘリコプタレスキューの様子は、[こちらの記事の中ほどに](#)。長野県警山岳警備隊の発表によると、この山行時(2009年8月8日および8月9日)2日間の長野県警管轄地域での遭難事故発生件数は、計7件。うち5件は中高年登山者でした。救助にあたって下さる方に、感謝いたします。なお、長野県警には、2013年2月に「やまびこ2号」(アグスタ AW139)が配備されたそうです。この機体は、「やまびこ」よりもさらにハイパワーなエンジンを搭載しており、海上保安庁などでも使われている新鋭機です。長野県警の高性能な県警ヘリ2機体制は、登山者にとっては福音です。

◆ちなみに、やまびこ2号のエンジンパワーは、石川県警ヘリのいぬわしの約3倍、航続距離は約2倍だそうです。より高く、より遠くまで余裕を持って救助ができる機材です。